曳博だより

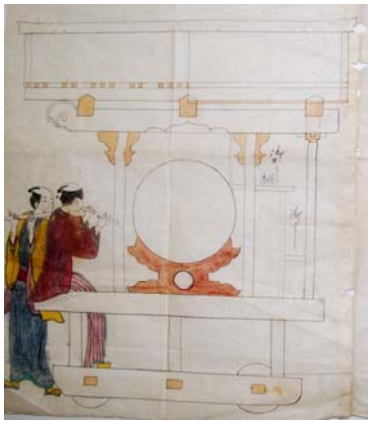
September 2012

曳山博物館　〒526-0059　滋賀県長浜市元浜町 14-8

曳山博物館・滋賀県立大学共同展示「湖北のソウルミュージックシャギリ」

曳山博物館では、九月三日(月)から二八日(金)まで「シャギリ」をテーマにした展覧会を開催しています。

この展示は曳山博物館と滋賀県立大学の共同展示です。大学からはシャギリが演奏される場である曳山の亭(ちん)の内部模型、そして大学の調査で見つかった旧落合村大工組囃子屋台図(滋賀県立大学図書情報センター所蔵)が出陳されています(写真)。県立大学には平成二三年に曳山祭りの子ども歌舞伎とシャギリの民俗調査をお願いし、これらの芸能の詳細な調査報告書を手掛けていただきました。また、調査に携わった学生たちによるワークショップを二回行いました。調査に参加した学生の中には、笛を購入して毎週山組のシャギリの練習に参加し、曲をマスターしてしまった人もいます。その人はいつも笛を持ち歩いていた、という証言?も耳にしました。本展は、このように、県立大学に調査を委託した契機で深まった大学との関係を背景としています。



さて、私の住んでいる長浜市宮司町では、曳山祭りの時期でもないのにどこからか曳山のシャギリが聞こえてくるということがあります。正確な季節は思い出せないのですが、長らく不思議に思っていました。宮司には宮川祭という、曳山祭の影響を色濃く受けた、かなり大きな祭りがありますが、シャギリは長浜のものとは全く違うものです。どこからか聞こえてきたものが宮司のすぐ北にある南田附のものだったということがわかったのは随分経ってからのことです。南田附は平成八年の囃子保存会の調査で、かつて町内の人が曳山に上がってシャギリをしていたこと、そのときは12の曳山が全て出ていて、終わるのは朝の6時頃だったこと、オコナイや地蔵盆などの行事でもシャギリをしていたことが明かになった地域です。但し私が聞いたシャギリは勿論生演奏ではなく、町のスピーカーから流れていたテープだろうと思います。

曳山祭のシャギリは過去と現在でその有り様がかなり劇的に変化したものの一つです。かつて曳山を持つ多くの山組が戦前及び戦後の一時期まで山組外の周辺

町村の人々にシャギリを依頼していました。これが昭和40年代になると山組を中心とする地元住民へと担い手が変化し、各曲の楽譜もつくられて継承が図られるようになります。本展示ではこの変遷を示すことが一つの目的です。九月九日には、やはり戦後に曳山祭のシャギリを担っており、最近復活して新たな活動を展開している唐国のシャギリもお聴きいただきます。

今回の展示は曳山祭だけに限定せず、エリアを湖北地域一帯に広げて、さまざまな行事や芸能で囃されるシャギリも紹介しています。これらの囃子は、楽曲や囃される場面、人数構成などは違いますが、曳山祭と同様に「シャギリ」と呼称され、各地で郷土色豊かな音色を響かせています。

百聞は一見にしかずと、八月一六日に高月渡岸寺の野神祭を、八月一九日に下余呉の太鼓踊りを見に行きました。このうち、八月一九日の太鼓踊りについて少し紹介しておきたいと思います。太鼓踊りは、雨乞いの儀式の結果、雨が降ったことに対するお礼として奉納される踊りです。雨乞い踊りが雨を求める切実さから簡素な装束で太鼓や鉦を激しく打ち鳴らして雷鳴を表象するのに対し、太鼓踊りは天が村人の願いにこたえてくれたお礼の踊りなので華やかに着飾って踊るのが本来の姿とされます。

下余呉の太鼓踊りは、現在は地域活性化と青少年育成のための行事として行われており、踊り手は子どもたちです。大太鼓の中学生が二人、小太鼓が五人（本来は六人）でこちらは小学五、六年生、そして鉦が二人です。そして笛は中学生の女子が八人、これに歌（音頭）の女子とタンバリンを叩く女子が加わります。小太鼓はシャグマと呼ぶ雄鳥の羽根で作った独特のかぶりものをしています。踊りは乎弥（おみ）神社に向かって「道行」という曲を演奏しながら歩いていくところから始まりますが、こちらではこのパレードのことを「シャギリ」と呼んでいます。同じシャギリという呼び名でもその形態や指し示すものが違うというところが面白いところです。神社に入ると、広場の中心に大太鼓二人が位置し、そのまわりを小太鼓五人と鉦二人が時計回りに円を描きながら踊りを奉納します。踊り手の子どもたちは時折声を上げて両手にもったバチを高く上げて振る動作をするのですが、ひょっとしたらこれが天に感謝する表現なのかな?と思います。笛や歌い手たちは一列に並んで踊りに合わせて笛や歌を披露します。この日は残暑厳しい神社の境内で、子どもたちの華麗な踊りを二時間近く堪能しました。展示では踊りに使われる太鼓や装束などをご覧いただきます。

現在湖北地域の民俗行事は、過疎化などで継続的な開催が難しくなるなど、激しい変化の波に晒されています。そんな中にあって今なお地域に息づくシャギリを感じていただければと思います。（大塚映明）

博物館実習

曳山博物館では八月二〇日（月）から二四日（金）まで、滋賀県立大学より博物館実習生を受け入れました。実習に来ていただいたお二人に感想をいただきましたので紹介します。

八月二〇日～二四日の五日間、長浜市曳山博物館で学芸員実習をさせていただきました。

実務内容の一部を体験させていただくことができ、貴重な経験となりました。その中でも印象に残っていることが二つあります。

まず、カメラで屏風を撮影させていただいたことです。

私は大学で日本美術史を専攻しているので屏風の絵を見る機会は何度もありましたが、展示ケースの中ではなく、間近で屏風に対面したことは初めてでした。また、その屏風を絵として見るのではなく、展示や資料にするために撮影する、ということも初めてだったので、何に留意すればよいのか、そもそもカメラをどのように扱ったらよいのかなど、初めてでわからないことだらけでした。しかし、学芸員の方にカメラの構造から丁寧に説明していただき、撮影の時もお手本を見せてくれながら撮影に挑戦したので、緊張しつつも自分なりに「こうした方がよいのでは?」というこだわりを持つことができました。その出来が良かったのか悪かったのかはわかりませんが……。カメラを扱うことはそんなに好きではありませんでしたが、学芸員の方が目の前でカメラを解体しながら説明してくださったので、とても面白かったです。今まで意味もよくわからなかった専門用語の意味がやっとわかり、カメラが少し分かったような気になりました。

二つ目は、資料の整理を手伝ったことです。曳山まつりに関連した資料の整理だったのですが、始めて知る情報がたくさん詰まっており、整理というよりも資料を読むことに熱中してしまったように思い、少し反省しています。資料整理の中で特に難しいと感じたことは、整理した資料に名前をつけることです。資料として残すためには、それが何の資料なのかわかるように名前を付けなくてはいけません。名前から内容を連想できるような名前……。自分のネーミングセンスの無さもありますが、一つ資料を扱うたびに頭を悩ませてしまいました。

五日間という短い期間ですが、貴重な体験をさせていただくことができました。初めてのことで失敗ばかりの私を、学芸員の方を始め職員の方々が温かく励ましてくださったので、自分なりに精一杯挑戦することができたと思います。お忙しい中色々なことを教えてくださった皆様に感謝しています。ありがとうございました。（鎌倉千穂　滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科）

曳山博物館で、五日間の博物館実習を経験させていただきました。博物館についてのお話を伺い、多くのことを勉強できた五日間でした。

学芸員の実務にも関わらせていただきました。

今回実務に関わることができたのが、実習の中でためになったこと、嬉しかったことの一つです。資料整理、資料の写真撮影、展示パネル作りといったことをやらせていただきました。学芸員の仕事のほんの一部だと思いますが、貴重な体験をさせていただきました。

実際にやってみて、楽しいと思う一方、博物館で働く人々はこれよりずっと多くの仕事をこなしているのだと思いました。また、どのように展示するかという細かい工夫があることを知りました。大学の講義で、学芸員の仕事はたくさんあるということを知識として知ってはいましたが、体験して感じるのとは違います。時間が限られている中で、工夫を凝らしながら多くの仕事を進めるのはすごいと感じました。

また、無形文化遺産の存続について伺ったお話が、強く印象に残っています。湖北地域には多くの祭りがあっても、昔のままの形で続けるのは難しいこと、続けることができずに消えてしまったものもある、ということを知りました。私自身、地域の行事が簡略化されていくところを見てきたので、他人事ではないように感じました。

地域の文化を守り、伝えることは大切な課題だと考えるようになりました。しかし、地元のことであるにも関わらず、知らないことがたくさんあり、また知らないままになってゆくことが多いと気付きました。今後はもっと地域に関心を持ち、知らずに過ごしてきたことを見つけたいと思っています。今まで博物館といえば資料の保存・展示というイメージが強かったのですが、

文化遺産を守り、多くの人に知ってもらうという側面もあると分かりました。

今まで知らなかったことを教えていただき、今まで考えてもいなかったことを考えるようになったのは、実習を通して得た収穫だと思います。このことを忘れず、これから色々な博物館に足を運んでみようと思います。

（橋本真佑美　滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科）

夏休み親子体験教室「金ぱく工作の体験！」を実施しました！！

曳山博物館では、去る八月九日に夏休みを迎えた小学生とその保護者の方を対象とした夏休み親子体験教室を開講しました。今回は、講師に市内の塗師　渡邊嘉久さんをお迎えし、三組の親子に本物の金箔貼りの体験をしていただきました。児童たちは、思い思いに図柄を考え、その図柄を貼りつけたカッティングシートを切り抜き皿に貼り、とても薄く扱いにくい金箔を慎重に接着後、不要な金箔をきれいに落とし、見事に自分だけのオリジナル作品を完成させていました。今回参加していただけたのは3組だけでしたが、普段触れることのない金箔の扱いなどに四苦八苦しながらも、滅多に体験できない本物の金箔貼りを楽しんでいただけたと感じています。今年の夏休みは、金箔貼り体験しか実施できませんでしたが、来年度はできるだけ多くの方に参加していただけるような企画を考えていきたいと思っています。（中山芳章）

特別展「演じられた戦国　絵本太功記の世界」9月29日(土)～11月4日(日)

絵本太功記は、寛政一一年（一七九九）初演。「絵本太閤記」などに基づき、明智（武智）光秀の叛逆を中心に秀吉（真柴久吉）を絡ませ、全十三日の話を一日一段に構成。十段目「尼崎の段」は「太十」と呼ばれて有名です。浄瑠璃で演じられたのち歌舞伎化されました。

豊臣秀吉は乱麻の時代をその智恵と創意工夫で乗り切り、国内の統一に成功した立志伝中の人物であり、最も日本人が好む武将です。普通に考えれば「絵本太閤記」のごとく、不世出の英雄の生涯を芝居に描き人々に夢と希望を与えつつ人気を集めることも可能でした。ところが「太功記」の中心人物は逆臣、明智光秀（武智光秀）なのです。

内容は一見、謀反人の悲惨な最期を描いたもののように見えますが、行間からにじみ出てくるのは光秀に寄せる作者の共感です。光秀は人々を不幸に陥れる暴君を天に成り代って民衆のために成敗してやったのだという作家の想いが見えます。江戸時代に推奨された臣のあるべき姿がここでは否定されていることにも気付きます。

歌舞伎も浄瑠璃も時代物から見る限りアンチヒストリー、時代の主流を巧みに批判する精神が脈々と息づいています。今回のテーマ「絵本太功記」は、まさに正鵠を射たものであり、光秀が春長を討たざるを得ない追いつめられた状況、謀反ではなかったと想わせる巧みな構成ゆえ庶民に喝采をもって受容されたのです。

本展示は、年間テーマ「演じられた戦国」の総集編ともいうべきものです。時代の評価とは異なる歴史観というものに視座をおいて展示構成をおこなってみようと思います。（中島誠一）